



第一号 平成28年4月1日 権中納言敦忠の山荘跡

大納言藤原國經(くにつね)は、若くて美しい妻(北の方)を溺愛していたが、ある正月、年賀に訪れた左大臣藤原時平に請われるまま、酒に酔った勢いでその妻を引き出物として差し出してしまふ。

谷崎潤一郎が、この『今昔物語集』(時平の大臣、國經大納言の妻を取る語)を題材として書いた小説『少将滋幹(しげもと)の母』に登場する少将滋幹とは、この國經の子のことである。滋幹は幼少の時に、父のもとを去った母に時平の屋敷で会うことがあった。そしてその時に見た美しい母の顔を生涯忘れることができなかった。

年を経てある日、滋幹は叡山の横川からの帰り道、雲母坂(きららざか)を下る途中で荒れ果てた家が見える場所に足を踏み入れた。そこは弟の権中納言敦忠の山荘であった。

敦忠は、藤原時平が北の方に生ませた子で、百人一首、「逢ひ見てののちの心にくらぶれば昔はものを思はざりけり」の歌で知られた人物である。

一方、時平も敦忠も若くして亡くなり、尼となった北の方はその後この山荘の近くに庵を結んで暮らしていた。

「もし、……ひょっとしたらあなた様は、故中納言殿(敦忠)の母君ではいらっしゃいませんか」

滋幹は、見かけた尼僧に近づき声をかけた。

幼い頃に別れて以来思慕しつづけてきた母に、滋幹は囚らずも四十年ぶりに月明かりに浮かぶ満開の桜の下で再会したのだった。

比叡山の麓、京都市左京区一乗寺の雲母坂(現在は曼殊院道(まんしゅいんみち))に、「権中納言敦忠山荘跡」と刻んだ小さな石碑が建っている。石碑に並記される「鷲尾家」は、昔一乗寺村に家領を有していた公家である。

NPO法人京都観光文化を考える会・都草

理事長 坂本 孝志